

2015年7月26日（日）メルボルン日本語キリスト教会 主日礼拝メッセージ 要約 柏倉 秀吉

聖書：マルコ1：1－8

タイトル：「主の道を整える」

\*\*\*\*\*

はじめに、これからの主日礼拝でのメッセージは、毎月第一主日は合同礼拝、第二主日は創世記（連続講解として）から、第三は今祈っているが、第四はマルコ（連続講解として）からメッセージを取り次がせていただきたいと思います。

\*\*\*\*\*

本日の箇所はマルコの福音書（1：1－8）である。

著者は、マルコと言われているが、実際にマルコがこの福音書を記したという記述はない。しかし、教父時代では「著者はマルコである」とされている。これらは最も信頼できる資料（エウセビオス（AD375）によるパピアス（AD115頃）の引用）の一つである。これだけでも著者はマルコであった言えよう。

私達が、これから教会で行っていききたい共通のテキスト「マルコ」のP11「マルコの福音書のはじめに」には、以下のように記されてある（一部抜粋）。

【この福音書は紀元65年ごろに書かれたもので、イエスの生涯について現存する記録の最古のものです。この書には、ペテロの目撃したことが記してありますが、マルコがペテロの説教や教えの中から記録したものです。著者マルコについては（使徒12:12他）、パウロやペテロの手紙の中の簡単な言及、マルコの福音書14:51, 52にあるマルコの自叙伝とも言われている箇所などから、知ることができます。マルコは親戚にあたるバルナバとともに、使徒パウロの第1回伝道旅行に同行しましたが、途中で一行から脱落してしまいました。そのためにパウロは、第2回伝道旅行にはマルコを同伴するのを拒絶しています。しかし、パウロがのちになってマルコを敬愛していること（Ⅱテモテ4:11）などから、マルコがキリスト者たちの指導者になるまでに成熟した人となったことがわかります。ペテロはマルコを「私の子マルコ（Ⅰペテロ5:13）」と呼んでいます。マルコの母親マリヤの家は、エルサレムのキリスト者たちの拠点となっていました。

マルコの福音書は、イエスの生涯を記録している四福音書の中で最も短いものです。この福音書の特徴は、完全に神であって完全に人であるイエスを、鮮明な写実によって提示していることです。マルコは16章のうち6章をイエスの最後の週の描写に当てています。このことから、この時の出来事をマルコがどんなに重要視していたかがわかります。この福音書の目的は、異邦のローマ人に向けて、イエスを神の子、キリストとして提示することでした。…】

またマルコの福音書は、「すぐに」「すると」などの言葉が多く、場面の展開が速いのが特徴である。おそらくマルコが、イエスの「行動」に注目していたからかもしれない。イエスの「行動」から、多くの展開があり、そこから人々の間で多くの御業が成されたのである。マルコの福音書を学ぶ中で、生き生きと活動されているイエスの姿を私達は教えられるのではないだろうか、期待している。

## 1節「神の子イエス・キリストの福音のはじめ」

「福音」とは、言うまでもないがマルコのものではなく、「イエス・キリストの福音」である。マルコは

はじめにはっきりと記したのである。

また「福音」とは、初代教会から生み出された新しい概念としての言葉であったと言えよう。「福音」という言葉自体の直接の意味は、「知らせ」あるいは「便り」という意味だが、その中には「良い」という意味も含まれていることから、「福音」とは「良い知らせ」のことを意味していた。直訳すれば「イエス・キリストの良い知らせ」ということになるが、これは、初代教会から人々に送り届けられている、言うなれば、確信に満ちた「イエス・キリストという真理のお方について記したまこと（良い）の知らせ（便り）である。」それを「福音」という言葉で表したのではないだろうか。

マルコは「…福音のはじめ」と記した。ギリシャ語本文を読むと、冒頭のことばが、「(ギ) アルケー」＝「初め」とある。このことから、「創世記と同様に、神は新しい創造的わざを始めようとしておられる。」と説明している注解者もいる。とすれば、マルコはそのような大胆な信仰を持ってこの言葉を記したのかもしれない。あるいはペテロがそのように大胆に語っていた。ということなのかもしれない。いずれにせよマルコは、信仰を持ってこの一節を記したのである。

2 - 3 節は、旧約聖書の御言葉の引用である。

2 節「預言者イザヤの書にこう書いてある。「見よ。わたしは使いをあなたの前に遣わし、あなたの道を整えさせよう。」」

マルコは「預言者イザヤの書にこう書いてある。」と記したが、実際にはマラキ 3:1 の御言葉である。

マラキ 3:1「見よ。わたしは、わたしの使者を遣わす。彼はわたしの前に道を整える。あなたがたが尋ね求めている主が、突然、その神殿に来る。あなたがたが望んでいる契約の使者が、見よ、来ている」と万軍の主は仰せられる。」である。

マラキ 3:1 を知るために、文脈を確認したい。

マラキ 1:1-2「宣告。マラキを通してイスラエルにあった主のことば。「わたしはあなたがたを愛している」と主は仰せられる。あなたがたは言う。「どのように、あなたが私たちを愛されたのですか」と。「エサウはヤコブの兄ではなかったか。——主の御告げ——わたしはヤコブを愛した。」

これは、主がイスラエルの民に直接、「愛している」と語られているのに対して、民は「どのように愛されたのですか」と、主に対して問いかけている。それに対して主はさらに、「…わたしはヤコブを愛した」と答えている。すなわち、人間の思いを超えた神の選びの愛の確かさ、その真実を示しているのである。それにもかかわらず、イスラエルの民は、非常に墮落していた。特に祭司の不敬に対することが強く責められている。

マラキ 1:6-8「子は父を敬い、しもべはその主人を敬う。もし、わたしが父であるなら、どこに、わたしへの尊敬があるのか。もし、わたしが主人であるなら、どこに、わたしへの恐れがあるのか。——万軍の主は、あなたがたに仰せられる——わたしの名をさげすむ祭司たち。あなたがたは言う。『どのようにして、私たちがあなたの名をさげすみましたか』と。あなたがたは、わたしの祭壇の上に汚れたパンをささげて、『どのようにして、私たちがあなたを汚しましたか』と言う。『主の食卓はさげすまれてもよい』とあなたがたは思っている。あなたがたは、盲目の獣をいけにえにささげるが、それは悪いことではないか。足のなえたものや病気のものをささげるのは、悪いことではないか。さあ、あなたの総督のところへそれを差し出してみよ。彼はあなたをよみし、あなたを受け入れるだろうか。——万軍の主は仰せられる——」

当時はバビロン捕囚時代である。イスラエルの民を支配していた「総督」がいたのだが、イスラエルの民

は、その「総督」にさえ差し出さないような傷のある、また病気の動物をいけにえとして神にささげていたのである。それゆえマラキ 2:1-2「祭司たちよ。今、この命令があなたがたに下される。もし、あなたがたが聞き入れず、もし、わたしの名に栄光を帰することを心に留めないなら、——万軍の主は仰せられる——わたしは、あなたがたの中にのろいを送り、あなたがたへの祝福をのろいに変える。もう、それをのろいに変えている。あなたがたが、これを心に留めないからだ。」と主は語られた。

その後の御言葉がマルコで引用されているマラキ 3:1 の御言葉である。つまりマラキ 3:1 の御言葉は、神の民へのさばきと悔い改めへの招きの御言葉である。「使者」とはそのための者である。主はさばいて終わりというのではなく、悔い改めに導くための「使者」を遣わされるのである。

続くマルコ 1:3 では、イザヤ 40:3 の御言葉を引用している。

イザヤ 40:3「荒野に呼ばれる者の声がある。「主の道を整えよ。荒地で、私たちの神のために、大路を平らにせよ。」  
今度は南ユダ王国がバビロン捕囚の前の時代に、イザヤを通して語られた預言の言葉である。時代はイザヤ 39:1 を見ると「ヒゼキヤの時代(BC730 頃-690 頃)」であったことが分かる。とすればイザヤからマラキまでは約 300 年ほど時代が違う。イザヤが預言している時、北イスラエル王国はアッシリアの巨大勢力・圧倒的な軍事力の前に、なすすべもなく陥落しアッシリアへ捕囚 (BC720) されたのである。捕囚の民として自国を追い出されるという悲運に見舞われた彼らは、戦争の苦しみの真ただ中であつたのである。

こうした中イザヤ (イザヤ自身は南ユダ王国に属しているが) は、繰り返しイスラエルの民の苦しみ、嘆き、恐れ、不安、そして絶望を語っている。そのような中、イザヤ 40:3 の御言葉は主の「救い」の希望を語っているのである。「使者」が遣わされるとは、確実に「救いがくる！」ということである。

悔い改めに導き (マラキ 3:1)、救いの訪れを知らせる (イザヤ 40:3)「使者」が来るというのが、マルコ 1:2-3 の旧約聖書の引用の意味と言えよう。

また、マルコがマラキの預言を「**イザヤの書**に」と記しているが、ユダヤ教の中ではこうしたメシアに関する「みことばの結合」は珍しくない。特にイザヤはユダヤ教にとって大預言者という存在であつた為、イザヤを預言者の代表として記し、マラキの名をあえて記さなかったと考えられる。

何よりマルコ (またはペテロ) は、旧約聖書の預言の御言葉がこの時に「成就した！」と確信したのである。つまり、あの旧約の預言の「使者」とはバプテスマのヨハネのことであり、この時代もまた、マラキ・イザヤが叫んでいたその時代と同じ状況が広がっていたということを見たのだろう。

当時はローマ帝国が支配する時代である。イスラエルの民は、自国に住んでいながらローマ帝国の支配の中にあり、またヘロデ王に媚びする祭司たちは不敬に陥り、祈りの宮といわれる神殿では、物が売り買いされ、主の律法は自己解釈の下捻じ曲げられていった。そんな中、「いったい神の律法とは何か、救いとは何か。」と誠の純真な心で「救い」を求める民の声がそこにはあつたのだろう。

今の時代は、一見、平和そうに見えるこの時代だが、「救い」ということを真剣に求めて叫ばなくなった時代である。それだけ、人々の心は神から離れ、鈍くなり、罪に対しても非常に曖昧で、自己中心的な生き方を「自由」とか「平等」というような風潮で掲げている。そういう時代ではないだろうか。それゆえ誠の純真な「救い」を求める叫びが必要なのである。

洗礼者ヨハネは叫んだ。

マルコ 4-5 節「バプテスマのヨハネが荒野に現れて、罪の赦しのための悔い改めのバプテスマを宣べ伝えた。そこでユダヤ全国の人々とエルサレムの全住民が彼のところへ行き、自分の罪を告白して、ヨルダン川で彼から

バプテスマを受けていた。」

驚くほどバプテスマのヨハネの悔い改めの言葉は、響きながら届いたのである。それは実に「ユダヤの全国…エルサレムの全住民」に届けられるまでの声であった。

彼らは、このヨハネの宣教の言葉を通して心に罪が示され、「自分の罪を告白して、…バプテスマを受けていた。」のである。

一方、当時は罪のために神殿でいけにえが捧げられている時代である。この時代に、罪の告白と捧げものを祭司と神殿で行わないで、ヨルダン川で洗礼を受けるというのはよほどのことである。それだけ彼らには決意があったと言えよう。言い換えれば、人々の心はそれほど「救い」を求める心で飢え渴いていた！ということであろう。

これらは、現代の私達が教わるべき、信仰の在り方ではないだろうか。

ヨハネの黙示録 22:20 にはこのように記されている。

「これらのことをあかしする方がこう言われる。「しかり。わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。」

この現代、私達の中で「主イエスよ、来てください」と切に望んで心から叫ぶ信仰者は、いったいどれほどいるのだろうかと考えさせられる。恥ずかしことだが以前の私自身こそが、自分の罪の問題が解決しておらず、信仰のツボに油が満たされておらず、「主よまだ来ないでください。準備ができておりません。」と言うことが多かったように思う。

クリスチャンになっても相変わらず自分のことばかりが忙しく、「主イエスよ、来てください」と真に御国を求め、御心を求めて御救いを待ち望み、自らに語られる主の御声を待ち望む！という信仰を私達は大切にしたいと思わされるのである。

洗礼者ヨハネだけではなく、イスラエルの民には「主を第一とする」心が、既に何千年もの歴史の中で養われ、培われてきたのは本当に素晴らしいことである。

さて、マルコ 1:6「ヨハネは、らくだの毛で織った物を着て、腰に皮の帯を締め、いなごと野蜜を食べていた。」とある。

第二列王 1:7-8 にはこのように記されている。

「アハズヤは彼らに尋ねた。「あなたがたに会いに上って来て、そんなことをあなたがたに告げた者は、どんな様子をしていたか。」彼らが、「毛衣(けごろも)を着て、腰に皮帯を締めた人でした」と答えると、アハズヤは、「それはティシュベ人エリヤだ」と言った。」

洗礼者ヨハネを見た彼ら(民)は、旧約聖書を知っていることもあり、洗礼者ヨハネが「預言者」であることを容易に認めることができたのかも知れない。

一方、洗礼者ヨハネについては、いくら自分が預言者だと自覚していても、このような服装と生活をしていくというのはなかなか出来ることではないと思える。もしかすると洗礼者ヨハネは、そうした自分の姿に酔いしれていたのだろうか。いや、違いうだろう。では、それほど彼を駆り立てたものはいったい何だろうか。

それは洗礼者ヨハネが、ただただ自分の使命というものに燃えていた！ということではないだろうか。自らが神から遣わされた「荒野で叫ぶ者の声である！」と確信しており、「神からのメッセージを人々に何としても伝えなければならないのだ！そのためには、どんな格好でも、どんな生活でもします！」と、主の前に、その信仰が確固たるものとして築きあげられていた！そういうことなのではないだろうか。

ルカ 17:7-10 にはこのように記されている。

「ところで、あなたがたのだれかに、耕作か羊飼いをするしもべがいるとして、そのしもべが野らから帰って来たとき、『さあ、さあ、ここに来て、食事をしなさい』としもべに言うでしょうか。かえって、『私の食事の用意をし、帯を締めて私の食事が済むまで給仕しなさい。あとで、自分の食事をしなさい』と言わないでしょうか。しもべが言いつけられたことをしたからといって、そのしもべに感謝するでしょうか。あなたがたもそのとおりです。自分に言いつけられたことをみな、してしまったら、『私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです』と言いなさい。」

私達にも、自己満足や賞賛を受けるためでなく、また「これは嫌だ、あれは嫌だ」等とは言わず、主の御心のままに、主が命ぜられるままに、その使命に生きる！という、主にまったく信頼していく純真な信仰が必要なのではないだろうか。洗礼者ヨハネの心の中にあったのは、まさにこの純真な信仰であっただろう。私達もそのような純真な信仰者になれるよう見習わせていただきたいのである。

洗礼者ヨハネは、マルコ 1:7-8 で次のように述べている。

「彼は宣べ伝えて言った。「私よりもさらに力のある方が、あとからおいでになります。私には、かがんでその方のくつのひもを解く値うちもありません。私はあなたがたに水でバプテスマを授けましたが、その方は、あなたがたに聖霊のバプテスマをお授けになります。」

「水」とは（聖書ではいろいろな意味があるが）、ここでは「さばき」を意味していると言える。その内容は「自分の罪に対する神のさばきである死を受ける」ということである。水の中に沈み（バプテスマ）、神にさばかれて過去の自分（の罪）が死ぬ。だからこそ、人は「救い」をより一層待ち望むのである。

洗礼者ヨハネは、人々にこの罪に対する神のさばきを明確に語っていたということであろう。「罪を悔い改めて、救いを待ち望みなさい！」ということである。これが「水でバプテスマ・悔い改めのバプテスマ」である。

続けて洗礼者ヨハネは（8 節最後）、「…その方は、あなたがたに聖霊のバプテスマをお授けになります。」と語っている。

「その方」とは、「神の子イエス・キリスト」（マルコ 1:1）のことである。すなわち「その方＝イエスは、あなたがたに聖霊のバプテスマをお授けになります。」と語っているのである。このイエスが授ける聖霊のバプテスマとは、神が与える新しい命のことであり、また新しい創造のことである。ヨハネの福音書 3 章でイエスとニコデモの会話がそうである。それが誠の「救い」なのである。

洗礼者ヨハネは、「このイエスが、聖霊によって私達に新しい命と新しい創造による誠の「救い」をお与えくださるお方なのだから、悔い改めてその方＝イエスを待ち望みなさい！」と、「荒野で叫ぶ者の声」となり、主の御心のままに仕えたのである。

確かに洗礼者ヨハネは、「救いはその方＝イエス＝主（のみ）である」ことを知っていたのである。しかし、この聖霊のバプテスマを授けるイエスが、まさか後には十字架で死なれると思っていたであろうか……。私達の救い主は、実に十字架に命を投げ出すほど私達を愛しているのである。私達は何より、この愛に感謝したい。そして、誠の救い主＝イエスを知っている私達は、洗礼者ヨハネのごとく、「主の道を整える者」として純真な信仰で生かされて行きたいと心から願わされるのである。